

## 入居者の暮らしに向き合う

社会福祉法人緑風会 特別養護老人ホームエリザベート成城

伊藤 陽平、松野 智優

(個別ケア ユニットケア 望む暮らし)

### 1. 目的

私たちの施設理念は、「私たちは、入居者の皆さまのこれまでの暮らしを継続し、心と心を大切に笑顔で豊かな生活を支援します」と掲げています。入居者の方々が、どんな暮らしをしてきたのか、また施設でどんな暮らしをしたのか、趣味・嗜好などあらゆることを知ること、つまりその人の暮らしぶりと人となりを理解しサポートすることが理念の実現に繋がると考えています。

しかしながら、日々職員は入居者の生活のサポートをしながら、入居者を知っているようで知らない、または知っていても実際のサポートに繋がっていないことがあり、入居者様に対するサポートの方針やその方法の統一性に欠けてしまっていることがあります。そこで、今一度、ケアチーム全員で入居者に向き合うことの大切さを再認識し、入居者が想う「暮らし」の実現ができるることを目的に取り組むこととしました。



### 2. 実践内容

- (1) 入居者の想う暮らしのアセスメント（入居者本人、その家族、関わるスタッフ全員へ聞き取り）
- (2) 眠りスキャンを使用し、睡眠状況から暮らしのリズムを確認する。
- (3) 調査の結果の整理・分析を専用シート用いて行う。
- (4) 整理・分析した結果から24時間シートを作成し、実際のケアを実施する。
- (5) 実施したケアで入居者の暮らしにどう変化があったのかなど評価・振り返りを行う。

### 3. 結果

入居者一人ひとりの暮らしをアセスメントする中で、「知らない」「そんなことを想っていたんだ」ということがたくさん出てきました。また各職員・各職種であまり共有されていなかった些細な情報が思った以上にたくさんあり、それを整理・分析すると今までとは違った入居者像が見えてきました。そして、その分析した情報をもとに今まで行っていたケアを見直し、入居者の望む暮らしに近づけるよう実践することとしました。暮らしの様子は、眠りスキャンのデータ結果からも知ることができました。視覚的に確認できるので、暮らしの課題や生活リズムの特徴を把握しやすいです。左右別々の入居者の方のデータ結果ですが、生活リズムが特徴的で暮らしの様子が伺えます。

これまでの整理・分析したものをもとに、入居者個々に望む暮らしに近づけるよう目標設定し、ケアの実践を行いました。そして、1か月ごとに各入居者の目標に近づくことができているか振り返り、評価するようにしました。実際に取り組んでいくと、考えていたことと違うことや新たな入居者の想いを知りました。最初は、今まで行っていたケアに加え実施するので、入居者より職員の方に戸惑いがありましたが、月日を重ねるごとにスムーズに行えるようになり、入居者の生活に

も変化が見られました。ある事例では、「杖で歩行できるようになりたい」という目標を掲げ、最初は職員のケアもうまくいかず本人も不満でしたが、回数を重ねるごとに入居者と職員がうまくできるようになり、本人も暮らしに楽しみを見つけることができることに繋がりました。また他の事例では、あまり長くベッドから離れて活動が難しい方に対し、いかに活動できる時間内で暮らしの楽しみを持ってもらえるかを考え実践し、入居者本人が以前に比べて生活の中に楽しみを見出せることに繋がった事例もありました。

#### 4. 考察と今後の課題

特別養護老人ホームは、入居者にとって「暮らし」の場です。入居される方々は、入居する前の「暮らし」があつて、入居してからの「暮らし」があります。それぞれが、全く別物になることは入居者にとって「暮らしにくい」場所に変わってしまいます。暮らしを継続させること、これは私たちが運営するユニット型特別養護老人ホームの使命であり、私たちの施設理念にも掲げています。

今回の取り組みを通して、入居者を知ること、つまりアセスメントの重要性を改めて実感しました。普段は、日々の業務の忙しさにまかせて入居者の想いを聞いていたり、実はしっかり聞いていなかったり、また職員間・職種間で細やかな情報交換が、十分出来ておらず、結果、本当の意味で入居者の暮らしに向き合えていないことを痛感しました。入居者一人ひとりの望む暮らしを支えることは、決して一人で行うことは不可能です。入居者と家族、職員が同じ暮らしのイメージを共有し、ケアチームの連携が取れ、望む暮らしに近づけられるよう介護ロボットも活用し、よりアセスメント力の向上ができるようにしたいと考えています。

~~~~~

<助言者コメント>

大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）

.....

雑居部屋（これは、当事者からみた言葉で、経営者のみなさんは相部屋とか多数室と呼ばれます）から個室ユニットケアへ。

2000年代の厚生労働省が打ち出した新しい政策でした。

それは、京都大学教授だった故外山義教授が、スウェーデンの特別養護老人ホームで暮らす21人のお年寄りを丁寧に調査した博士論文『IDENTITY and MILIEU』に基づく政策でした。「MILIEU」はフランス語で、永年の暮らしの場から余儀なく離れなければならなくなつた時、高齢者のアイデンティティーはどう脅かされ、どのように自己を取り戻していくか。克明なデータを駆使して分析したこの論文で、国際的に高い評価を得ました。

外山さんが亡くなり、この制度を導入した老健局長が厚生労働省を退官したいま、この個室ユニットケアが、年ごとに形骸していると言う声が聴こえます。

「エリザベート成城」のみなさんの「暮らし」に着目したこの取り組みが、原点にもどるために、貢献することを願います。

最後のところになって、突然「介護ロボットも活用し」という文章がでてくるところが、少しだけ心配です。介護ロボットの本質を分かってのことなのかしら、と。